

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



氏名 (Name) Y.O
所属 (School) 人間社会研究科
学年 (Grade) 4 年次

留学先 (Name of overseas institution)
16th International Conference on Children's
Spirituality (Université Laval)

留学期間 (study abroad period)
2018 年 7 月 23 日-2018 年 8 月 4 日

記入日 (Date) 2018 年 8 月 11 日

留学レポート Study Abroad Report

カナダ、ケベック州ケベックシティにあるラヴァル大学 (Université Laval) にて、7 月 24 日から 27 日まで開催された国際学会 (16th International Conference on Children's Spirituality) に参加しました。学会は、初日にレセプション、その後早速、基調講演と論文発表のセッションがあり、25、26 日は終日基調講演、論文発表、パネル発表、ワークショップが続き、27 日最終日は論文発表の後、パネルディスカッションで会議全体の締めくくりが行われるという流れでした。学会後はトロントに移動し、近隣のヴァルドルフ学校を訪問したり、トロント大学の Miller 教授の研究室を訪ね、授業に参加させてもらったりしました。まず、学会が行われたラヴァル大学とケベックシティについて、次に会議全体の様子と私自身の発表について、最後にトロントで訪問した学校や大学の授業について報告をしたいと思います。

ケベックとラヴァル大学



カナダ東海岸に位置するケベック州はフランス語圏、都市部にすむ人々は英語を話すものの、少し郊外にできればフランス語しか話せない人も大勢います。州都であるケベックシティは、北米唯一の要塞都市といわれ、世界遺産にも登録されている美しい街です。町のつくりや建物、道行く人のファッションにはヨーロッパの影響が色濃く表れ、他の北米の都市とは異なった雰囲気を感じられます。カナダ自体、英語とフランス語を公用語に定め、公共の場において両言語の併記が義務付けられてはいますが、カナダからの分離、独立運動が激しかったこともあるケベックでは、フランス語の文化を守る目的もあって、まず目にし、耳にするのはフランス語です。そのケベックシティ郊外にあるラヴァル大学は、1852 年に創立された北米最古のフランス語系の総合大学で、神学部、法学部、医学部など 17 の学部からなり、カナダ

首相やケベック首相など多くの著名人を輩出しています。ケベックシティからも、ジャン・ルサージ空港からも車で10分ほどという立地の良いキャンパス内には、バスや車用の道路が走り、その広大さを印象づける傍ら、木立の間の芝生ではリスやマーモットが走り回るのどかさもありました。そのような場所で行われた学会の基調講演など主だったスピーチには、フランス語、英語の同時通訳がつき、聴衆はスピーカーの言語に合わせて利用していました。

16th International Conference on Children's Spirituality

2年に一回ヨーロッパと北米で交互に開催され、今回16回目となる本学会には、北米、ヨーロッパはもちろん、南米やオーストラリア、アジアなど様々な国から研究者や実践者が参加し、彼らの背景も神学、教育、医療、福祉など多岐にわたりました。学会をホストしたラヴァル大学神学部の Champagne 教授をはじめ、スタッフや院生のホスピタリティもすばらしく、暖かな雰囲気での学会でした。

今回の学会テーマが、特に子供のスピリチュアリティと伝統の関係性ということで、社会の規範や保守性、変化への対応、世代ごとのアイデンティティ、宗教的儀式の意義と危険性、スピリチュアリティを商品のように扱う弊害についてなど、様々な角度から問い直しがされました。その中で繰り返し現れるのが、スピリチュアリティという言葉が何を意味するのかという問いかけで、ウェル・ビーイングなどの言葉で置き換えようとしたが無理がある、スピリチュアリティの捉え方、生活における現れは子供の年齢に応じて変化する、病や死、虐待など困難に直面する子供たちにおいては意味合いが異なる、スピリチュアリティを語る際のスタンスが理想主義的に陥りやすい、など議論がなされました。例えば、WHOの要請を受けて11歳から15歳までの子供を対象に、彼らにとってのスピリチュアリティに関する経験を量的、質的に研究している研究者は、子供たち自身にスピリチュアリティの定義をしてもらうことから始めたことを語り、その上で自己との関係、他者との関係、自然との関係、超越や変容との関係という4つを概念枠組にしたとし、現時点では自己との関係においてスピリチュアリティが最も必要とされているという結果を発表していました。活発な議論の中で印象的だったのが、程度の差はあれ、各国、地域において世俗化とテクノロジーの影響は大きく、個人としての探求と共同体との繋がりとの構築の両方が課題であるということでした。

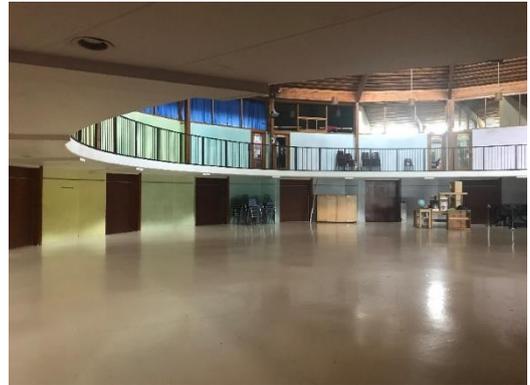


私自身は、研究テーマであるシュタイナーの思想をもとに、学会の鍵概念の一つでもあったスピリチュアル・アイデンティティという言葉の意味、その形成と変容のために言語が果たす役割を、シュタイナー独自の思考に関する理解と関連づけて発表しました。発表は、もう一人の発表者と合わせて90分という枠が用意されていたのですが、相方が急病のために欠席し、時間全部をもらえたこともあり、なんとか20分でおさまるようにしていた

発表も余裕をもって話すことができ、観念的な部分も含めて、よく理解してもらえたと思います。おかげで、たっぷりあった質疑応答の時間には、神学や哲学の分野の研究者たちから、今後の研究に重要になる問いかけや理論的枠組についてのアドバイスをもらうことができ、また実践者の人たちからは具体的な質問やその方たちの実践と発表内容との比較の紹介などもあって、議論が膨らみ、活気ある場となりました。様々な分野の研究者が集まっているからこそ、理論の面から実践のレベルまで色々な話を互いに行うことができたのだらうと、この学会に参加したことをうれしく思いました。また、学会期間中の食事やケベックシティの宗教・文化施設の訪問、町の散策などを経て、参加者との交流が深まった最終日での発表だったことも、ラッキーだったのかもしれない。

学校訪問

さて、学会終了後はトロントに移動し、北米のヴァルドルフ学校の中でも大きいトロント・ヴァルドルフスクールを訪問しました。残念ながら夏休みで、サマープログラムが進行中ということもあり、多くの教室が普段の設えにはなっておらず、子供たちの日常を見ることはできませんでした。けれども、今年 50 周年を迎える学校が、その歴史の中でも非常によい時期にあることや最近隣接する小さな森を買い取ることができて敷地が広がったことを聞いたり、おそらく学校の理念を最もよくあらわしている建物（特にメインの円形ホールはまわり一周に各クラスへの扉がついて、生徒がそれぞれの教室に入れるようになっており、学校全体の集まりにも、子供たち同士のレクリエーションにも使えるようになっていた）を見学したりすることができました。忙しい中で、時間を作って案内してくれた先生と、ヴァルドルフ教育やシュタイナー思想の理想主義的な側面など学会であがった疑問点についての話をしたことも有意義でした。



また、トロントでは以前参加した学会を通して知り合ったトロント大学オンタリオ教育研究所の Miller 教授の夏期コースに参加させてもらうことができました。コースはメタファーやビジュアライゼーション、環境教育の手法を用いたホリスティックな学びの方法論について学習し、自分なりのカリキュラムを作り上げるとともに、瞑想を実践し、ジャーナルをつけることを通して、教師としてのプレゼンスを高めることを目標としています。3 時間の授業の前半は学生による発表、後半がミラー教授の講義という構成になっていました。参加する学生や院生のほとんどが現役の教師だったり、教育機関に勤めていたりするので、彼らの発表は学んだことをもとに、すぐに教室で使えるような実践にまで練り上げたものでした。私が参加した授業では、学生たちの発表は近くの公園で行われ、先住民に関する授業に興味がある先生たちのグループが、地水火風の 4 つの要素それぞれのエッセンスを感じてもらうプログラムを用意したり、別のグループが公園内で一番自然を感じたものと向かい合い、絵をかいたり、その印象につ



いて話し合ったりといったアクティビティをいくつか発表し、実際に行ったりしました。隣り合った学生たちは、先住民の授業は白人としてやりにくいところもある、教授の授業をずっと受けたいと考えていて、今学んでいることがいかに素晴らしいかを実感している一方、そのための心持を実際に学校が始まった後も保つことができるかは大きな挑戦だと感じているなど、正直な気持ちを話してくれました。いかなるホリスティックな実践も、教師が何を意図し、どのような心の在り方でおこなっているかが最も重要であることを、今回の学会と重ねつつ、しみじみと感じました。